RAYMOND CHANDLER'S

PHILIP MARLOWE

フィリップ・マーロウの事件

バイロン・プライス編／木村仁良・他＝訳

I

1935—1948

RAYMOND CHANDLER'S

PHILIP MARLOWE

フィリップ・マーロウの事件

バイロン・プライス編／木村仁良・他＝訳

I

Hayakawa Novels

検　印
廃　止

フィリップ・マーロウの事件 I
1935—1948

1990年2月20日　初版印刷
1990年2月28日　初版発行

編　者　バイロン・プライス
訳　者　木村仁良・他
発行者　早　川　浩

発行所　株式会社　早川書房
東京都千代田区神田多町2—2
電話　東京(252)3111(大代表)
振替　東京・6-47799

印刷所　三松堂印刷株式会社
製本所　大口製本印刷株式会社

ISBN4-15-207677-1 C0097
Printed and bound in Japan

フィリップ・マーロウの事件 I

1935—1948

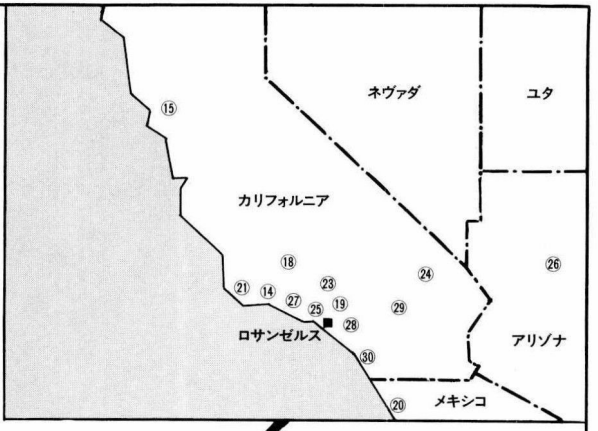
日本語版翻訳権独占
早 川 書 房
© 1990 Hayakawa Publishing, Inc.

RAYMOND CHANDLER'S PHILIP MARLOWE
A CENTENNIAL CELEBRATION

Edited by Byron Preiss
Copyright © 1988
by Byron Preiss Visual Publications, Inc.
Introduction copyright © 1988
by Frank MacShane
Individual stories copyright © 1988
by Simon Brett, Robert Campbell, Max Allan Collins,
Robert Crais, Loren D. Estleman, Ed Gorman, James Grady,
Joyce Harrington, Jeremiah Healy, Edward D. Hoch,
Stuart M. Kaminsky, Dick Lochte, John Lutz, Francis M. Nevins, Jr.,
Sara Paretsky, W. R. Philbrick, Robert J. Randisi,
Benjamin M. Schutz, Roger L. Simon, Julie Smith,
Paco Ignacio Taibo II, Jonathan Valin,
and Eric Van Lustbader respectively.
"The Pencil" by Raymond Chandler
Copyright © 1971
by Helga Green, executrix, estate of Raymond Chandler.
First published 1990 in Japan
by HAYAKAWA PUBLISHING, INC.
This book is published in Japan
by arrangement with ED VICTOR LTD.
through TUTTLE-MORI AGENCY, INC., TOKYO.

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

のロサンゼルス



リヴァーサイド・ドライヴ

③ ⑪

フランクリン・アヴェニュー

ブールヴァード

サンセット・ブールヴァード

フィゲロア通り

ウェスタン・アヴェニュー

ノース・メイン通り

⑧

七番通り

オリーヴ通り

⑤

フィゲロア通り

メイン通り

ヒル・ストリート

アラメダ通り

⑯サンドールの家（Ⅰ、「悲しげな眼のブロンド」）
⑰サン・ヴィセンティ・ブールヴァード四四九番地（Ⅰ、「片腕の男」）
⑱ボイルストン農場（Ⅰ、「ディーラーの選択」）
⑲マイラ・ヒートレーの家――パサデナ（Ⅰ、「レッド・ロック」）
⑳ロサリート――メキシコ（Ⅰ、「国境の南」）
㉑ビッグ・ロック・リゾート（Ⅰ、「スター・ブライト」）
㉒キャッシュ夫妻の家（Ⅱ、「苦いレモン」）
㉓日干し煉瓦造りの小屋（Ⅱ、「ディック・ボングを知っていた男」）
㉔ガソリン・スタンド（Ⅱ、「悪魔の遊び場」）
㉕ガラスの靴（Ⅱ、「エイシャ」）
㉖フラッグスタッフ（Ⅱ、「マーロウ最後の事件」）
㉗プリシマ・キャニヨン（『さらば愛しき女よ』）
㉘エリザベス・マードックの邸――パサデナ（『高い窓』）
㉙ビューマ湖（『湖中の女』）
㉚ランチョ・デスカンサド（『プレイバック』）

レイモンド・チャンドラー
Photograph by Douglas Glass
arranged through Ed Victor Ltd
© Hayakawa Publishing, Inc.

①マーロウのオフィス――ハリウッド・ブールヴァードのカヘンガ・ビル615号室
②マーロウの住居――ユッカ・アヴェニュー（『長いお別れ』）
③マーロウの住居――ホバート・アームズ館（Ⅰ、「黒い瞳のブロンド」）
④マンモス映画（Ⅰ、「ガン・ミュージック」）
⑤オリンピック競技場（Ⅰ、「マリブのタッグ・チーム」）
⑥MGM映画のエディーのオフィス（Ⅰ、「街はジャングル」）
⑦スターダスト・クラブ――ベイ・シティ（Ⅱ、「スターダスト・クラブの殺人」）
⑧ギャラクシー真珠（Ⅱ、「東洋の精」）
⑨コーヒー・ショップ（Ⅱ、「職務遂行中に」）
⑩ハリウッドの高級ホテル（Ⅱ、「アリバイ」）
⑪ベニーとミニーの住み込んでいる家（Ⅱ、「鼠たち」）
⑫アーサー・グウィン・ガイガーの家（『大いなる眠り』）
⑬メイヴィス・ウェルドのアパートメント（『かわいい女』）
⑭ドロレス・ドッドのサイドウォーク・カフェ（Ⅰ、「完全犯罪」）
⑮マーロウの生まれた町サンタ・ローザ（Ⅰ、「グレースをさがせ」）

フィリップ・マーロウ

ローレル・キャニョン・ブールヴァード
ヴェンチュラ・ブールヴァード
カヘンガ・ブールヴァード
マルホランド・ドライヴ
ハリウッド・ブールヴァード
サンタ・モニカ・ブールヴァード
ウェストウッド・ハイウェイ
ハイランド・アヴェニュー
ウィルシャー・ブールヴァード
オリンピック・ブールヴァード
ピコ・ブールヴァード
ワシントン・ブールヴァード
ホーム・ブールヴァード
サン・ヴィセンティ・ブールヴァード
二六番通り
ブールヴァード
ベイ・シティ
ウィルシャー
サンタ・モニカ・ブールヴァード
オリンピック・ブールヴァード
ピコ・ブールヴァード
パシフィック・コースト・ハイウェイ
オーシャン・パーク・ブールヴァード
リンカーン・ブールヴァード
セブールヴェイダ・ブールヴァード
ラ・シエネガ・ブールヴァード

装幀／辰巳四郎

目次

編者まえがき／バイロン・プライス　9
序　文／フランク・マクシェイン　15
1935
完全犯罪　マックス・アラン・コリンズ／田口俊樹訳　27
1936
黒い瞳のブロンド　ベンジャミン・M・シュッツ／木村仁良訳　65
1937
ガン・ミュージック　ローレン・D・エスルマン／朝倉隆男訳　87
1938
グレースをさがせ　ジョイス・ハリントン／嵯峨静江訳　113
1939
マリブのタッグ・チーム　ジョナサン・ヴェイリン／真崎義博訳　149

1940
悲しげな眼のブロンド　ディック・ロクティ／石田善彦訳　175
1941
片腕の男　W・R・フィルブリック／朝倉隆男訳　207
1942
ディーラーの選択　サラ・パレツキー／山本やよい訳　233
1944
レッド・ロック　ジュリー・スミス／長野きよみ訳　259
1945
国境の南　パコ・イグナシオ・タイボ二世／長野きよみ訳　281
1946
深夜の依頼人　フランシス・M・ネヴィンズJr.／鈴木啓子訳　297
1947
街はジャングル　ロジャー・L・サイモン／木村仁良訳　319
1948
スター・ブライト　ジョン・ラッツ／大井良純訳　333
作家紹介　357

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

編者まえがき

バイロン・プライス

完璧なアンソロジーというものは存在しない。非常に優れたものは、ごくまれである……傑作選と称するもののなかには……アンソロジーというより、むしろ寄せ集めにすぎないものもある。その価格にしては多くのものを与えてくれるが、手首を捻挫せずに持っていられるのは鉄人ぐらいのものだ。こういう読み方をしなければならないのなら、わたしは『ウェブスター大辞典』を手にするだろう。退屈なページが一つもないのだから。

――レイモンド・チャンドラー

わたしは、すでに手を染めている企画の妥当性を捜し求めるために、UCLA（カリフォルニア大学ロサンゼルス校）にやってきた。レイモンド・チャンドラー生誕から約百年後、彼がフィリップ・マーロウのキャリアにおける最後の文章をタイプで打ってから約三十年後、わたしはチャンドラーの業績を讃えるために、彼の著作権継承者の許可を得て、現代ミステリ作家二十三人に、新しいフィリップ・マーロウ物語を書いてほしいと依頼した。

ロサンゼルスでは典型的な晴天の午後、わたしのガイドをしてくれたのは、小説家であり、一流のテレビ脚本家であるエドガー賞候補者ロバート・クレイスだった。彼はマーロウの年齢、三十八ぐらいに見えた。チャンドラーなら彼を気に入るだろうと思う。彼はチャンドラーがミステリ作家に寄せる希望が現実となった例である。人望が厚く、高い報酬を得ており、チャンドラーの最高水準の域に到達して、自分のミステリ小説を文学として扱ってもらおうと切望している。

クレイスはわたしを大学の学術図書館に案内してくれた。そこには、チャンドラーの残存する膨大な書簡や原稿が保管されている。いろいろと説明を受けたあと、わたしたちは〈レイモンド・チャンドラー、一八八八年～一九五九年。『プードル・スプリングス物語』。ラ・ホヤ、一九五九年一月二十三日。二二×一四cm。自筆の訂正入りタイプ原稿〉というような、興味をそそるラベルのついたフォルダーや封筒がはいった茶色い箱を六つか七つ渡された。わたしはその封筒をとくにていねいな手つきで開けて、中身を引き出した。そして、カナリア色の原稿を手につかんでいた。標準のタイプ用紙を半分に切ったもので、縦長に使ってトリプル・スペースでタイプが打ってある。チャンドラーは青いタイプ・リボンを使っていて、その視覚効果は、ハードボイルド文学の天才から思い浮かべるイメージとは全く正反対だった。その原稿は美しかった。その色合いはジヴェルニーのダイニングルームにおけるモネの磁器を連想させた。カナリア色と紺青色。レイモンド・チャンドラーが書くフィリップ・マーロウの最後の色だ。

わたしたちはそのページに目を通してから、『プレイバック』の原稿やチャンドラーの書簡に移った。チャンドラーはUCLA図書館のウィルバー・スミス宛の手紙の中で、この黄色い原稿用紙の意図を説明していた。「用紙一枚につき一二五語から一五〇語の文章で、短かすぎ

るので冗長にはなりません。一枚ごとにちょっとした内容がなければ、どこかがおかしいのです」

そこの資料に没頭していると、閉館まであと数分しか残っていないと、クレイスがわたしに教えてくれた。わたしはこのアンソロジーを編む妥当性を裏づけてくれるチャンドラーの言葉を見つけたいという欲望をふたたび伝えた。

翌日、わたしは図書館に戻った。テレビシリーズ《旋風児マーロウ》について、チャンドラーがエドガー・カーター（ハリウッドのH・N・スワンスン文芸代理店に勤務）に書いた、一九五七年六月三日付の書簡を見つけた。その中で、チャンドラーはそのテレビ番組における自分の役割について、ただのマーロウの会話の作家として論じている。

……我慢できないほど思い上がった男だと思われる危険を冒してでも――そう思われるのは確実かもしれませんが――わたしがマーロウの性格をうまく表現できるならば、彼の偽物ではなく、本物が存在していると、自ら信じられるように思えます……結局、十五年以上ものあいだ、たいへん多くの作家がわたしからマーロウを奪い取ろうとしましたが、まだ成しとげた人はいません。作家というものはみな頭がおかしいのではないかと思いますが、彼らに取柄があるとしても、馬鹿正直なところであると、わたしは思います。

ついに、このアンソロジーに関連するチャンドラーの言葉を見つけたが、どう見ても、がっかりさせられるものだ。マーロウが偽善に耐えられない男であることがわたしの頭に浮かんだ。ほかのミステリ作家たちとともにマーロウ物語を続ける正当性はあるだろうか？

わたしは資料に戻り、ジェイムズ・サンドー編のアンソロジー *Murder Plain and Fanciful* に対するチャンドラーの好意的な書評を読んだ。その一部がこの「まえがき」の冒頭を飾っている。わたしたちの企画の支えになった彼の言葉をその最後のページに見つけた。チャンドラーはサンドーについてこう書いている。

> （サンドーが）はっきりそう言っているわけではないが、彼はこのミステリという消し去ることのできない芸術の年代記を、われわれの時代における唯一、真に重要な文学と見なしているような気がする。それは――ある者にとっては不気味で、ほかの者にとっては美味な、大勢の者にとっては魅力的ともいえる――題材に理知的に没入することが、これまで以上にすぐれた作品を生み出すためのほとんど唯一の枠組みであると、わたし自身考えていたからである。

チャンドラーの精神を刺激したのは書き方であった。彼の想像力をかきたて、執筆作業を推進させたのは、ミステリの持つ可能性への愛情であった。彼の書簡はミステリという芸術についての考えで満ちあふれている。自分自身の作品に対する最も大きな希望は、文学として残っていくことであった。ミステリを文学とみなす深い尊敬の念は、このアンソロジーの作家たち全員が持っていると言っても間違ってはいないだろう。彼らはチャンドラーの仲間である。もしチャンドラーがダシール・ハメットやジェイムズ・ケインのあとから小説の路地裏にはいり、芸術の領域にまで踏みこまなかったら、彼らの多くは作家にはなっていなかっただろう。このアンソロジーの寄稿者たちは彼から盗むのではなく、彼の栄誉をたたえているのだ。彼が一九

五九年にアメリカ探偵作家クラブの会長に選ばれた時のように、寄稿者たちの注目を浴びて、光栄に感じるだろうとわたしは思う。彼なら、このアンソロジーの収録作品を一つずつ批評し、読みおえたあとで、比較的気に入った作品を見つけるかもしれないが、それも完璧とは言わないだろう。マーロウの世界で完璧だったものは何一つないのだ。だが、そこに根底のモラル、普通の男の崇高さが存在するなら、一考するだけの価値はある。サンドーへのチャンドラーの書評はわたしに、今回の共同作業に尊敬の念がこめられていると感じさせてくれた。その理由から、また寄稿者たちの善意に応えるためにも、わたしはこのアンソロジーを敢行する。ただ、チャンドラーに読んでもらえないことだけが心残りである。

（木村仁良訳）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com